



episode 32 白い馬からもらった希望と宝物

投稿者 光子 さま(愛媛県)



『スーホの白い馬』
大塚勇三 再話 赤羽末吉 画
福音館書店 1967年

「大ちゃん、カマキリって言うてみ。」近所の主婦の声が聞こえる。
「よう言わんの。うちの子はもう言えるよ。」
窓から外を見た私の目に、次男の困惑した顔が映る。
直ぐ様飛び出して、彼を庇護したいのだが、体が固まって動かない。そんな自分が不甲斐ない。
次男は四歳。一般的な四歳児なら、「お父さんは会社に行った。」などの会話が成立する歳だ。
しかし、彼は未だ、あまり言葉を発しない。
何故か、玉子をカンカン、父親をテイと、彼特有の単語で呼んだりしていた。
そんな彼の存在は、同じ年頃の子供を持つ母親達の、興味的となった。
「愛情が足りんのじゃない。」「絵本の読み聞かせやとん？」色々、言われた。
人より言葉を発するのが早かった長男。同じ様に愛情を注ぎ、読み聞かせもしているのに。
毎晩、夫の前で号泣した。
「大丈夫。あいつは今、言葉を溜めとるんや。そのうち、うるさいくらい喋る様になるけん。あいつを信じろ。」
夫の言葉だけが支えだった。

その日も、次男に絵本を読んでいた。『スーホの白い馬』。
内容は知らないが、図書館のお勧めコーナーに並んでいた。
表紙に、白い子馬を大事そうに抱えた少年が描かれている。心の中が、じんわり温かくなる様な絵。
ページを捲り、読み進むうち、鼻の奥がツンとしてきた。声が震える。堪えながら読んでいたが、ダメだ。
涙が止まらなくなった。次男は、不安そうに私を凝視している。
平静を装おうとする私を置いて、彼は何処かに消えた。そしてタオルを握って、戻って来た。優しく私の涙を拭う。
その時、彼に対して今まで抱いていた不安が一気に吹き飛んだ。ギュッと彼を抱きしめる。
言葉を発しなくても、人の心はちゃんと理解できる子に育っている。
いつ喋れるようになるのか、気にするのを辞めた。

気が付けば、彼は人一倍お喋りな少年になっていた。あの日、白い馬からスーホと私は、希望と宝物を貰った。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2024」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



2冊の表紙画が語る『スーホの白い馬』

赤い民族衣装を身にまとった青年が、白い馬を抱きかかえている表紙画の『スーホの白い馬』は、モンゴル民話として日本でも広く知られています。本作は1967(昭和42)年、福音館書店より出版され、半世紀以上経った現在でも増刷を重ねていますので、その表紙絵を目にすると、「知っている」と認識する方も多いのではないのでしょうか。

本作には、もうひとつの表紙画版があります。『スーホの白い馬』の初出は、福音館書店の月刊絵本「こどものとも」1961(昭和36)年10月号で発表された「スーホのしろいうま」でした。

1952年2月に創業した児童書の老舗出版社・福音館書店は、創業の翌年9月には子育て中の保護者向け月刊誌「母の友」を創刊します。その2年半後の1956年4月に創刊したのが子ども向けの月刊絵本「こどものとも」でした。創刊より、毎月一冊一話を欠かさず刊行し続けた5年後の第67号で「スーホのしろいうま」が登場したのです。



編集者がみた新人絵本画家の成長過程

「スーホのしろいうま」の誕生は、新人の赤羽末吉氏がはじめての絵本『かさじぞう』を出版したとき、二作目の絵本はモンゴルを舞台にしたお話を希望したことにはじまります。それを受けて福音館編集の松居直氏が、大塚勇三氏に「モンゴル語の昔話を中国語から訳してほしい」とお願いすると、『馬頭琴』伝説を見つけてきたのでした。大塚氏に、原文を短く整理してもらい完成した月刊絵本「スーホのしろいうま」の刊行から3年ほど経ったとき、単行本発行の話になりました。

そこで赤羽氏は、「大型本でやりませんか」と松居氏にもちかけるのです。縦19cm×横26cmの初版ではモンゴルの大草原の広大なイメージ画を伝えられず、編集者として自身の企画の失敗を感じていた松居氏は、サイズも形、ページ数いっさいを赤羽氏に任せること

にしました。こうして、現在私たちが手にしている大判の迫力ある『スーホの白い馬』が生まれたのです。

赤羽氏のはじめての絵本制作にあたり、幸運な出会いを果たしたという松居氏は、「二冊のスーホを比較すると、赤羽さんの絵本画家としての発展が見事に理解できる。絵に物語らせる方法をこの6年間に完全にマスターされていることがわかる」と評しています。「スーホのしろいうま」から『スーホの白い馬』の刊行までの6年の間における制作と編集の積み重ねは、ひとりの画家と、ひとりの編集者を成長へと導いているのです。



読む者の物語となる

1961年の初出から、日本人の心をあたたくしたり、いのちを見つめなおしたり、あるいは異文化に思いをはせたりしてきた『スーホの白い馬』のお話は、「モンゴル国と中国の内モンゴル地域においても存在しない」と、内モンゴル出身のミンガド・ボラグ氏によって指摘され、物議をかもしています。ボラグ氏の著書『「スーホの白い馬」の真実』(風響社、2016)に端を発する議論です。

一方、『スーホの白い馬』は、モンゴル人の間で『馬頭琴の物語－スーホの白い馬』という名称で伝承されているとの反論があります。この説を唱えたのは、東京学芸大学個人研究員の蒙古貞夫氏ですが、『スーホの白い馬』で描写されている、モンゴルに伝わる伝統文化との矛盾点に対する指摘は、ボラグ氏と共通しているのです。

私たちが親しんできた『スーホの白い馬』も、これからの子どもたちが浸るであろう『スーホの白い馬』も、読んだ者の物語になってこそ、評価となるのではないのでしょうか。

文献

- 1) 赤羽末吉：絵本よもやま話，東京，偕成社，p.135-140，1979.
- 2) 松居直：松居直と『こどものとも』(シリーズ・松居直の世界2)，ミネルヴァ書房，京都，p.209-212，2013.
- 3) 石井正己 編：世界の昔話を知るために！，三弥井書店，東京，p.157-160，2025.